

〈創作〉

## 名月乗桂木

Every night, the Moon watches Nose town.

片山 剛<sup>1</sup>

### 要旨

本稿は論文ではなく、筆者の創作した新作浄瑠璃『名月乗桂木』の原作について解説とともに掲載するものである。この作品はすでに大阪府能勢町の浄瑠璃シアターなどで上演されてきたが、それは数回の修正を経た台本によるものである。その修正本文は、すでに何度もプログラムに掲載されているが、その基になった原作はお蔵入りの状態であり、今後も表に出ることはないと思われる。そこで、創作の経緯や主題などについて述べつつ本紀要に掲載していただくことにしたのである。

キーワード：能勢町，浄るりシアター，鹿角座，新作浄瑠璃

Nose-town, Jyoruri-theatre, Theatre Company Rokkakuza, Original Jyoruri

### はじめに

大阪府最北部の豊能郡能勢町は、多田源氏の流れを汲む能勢氏<sup>1)</sup>が居所とし、多田満仲(?～977)以来の妙見信仰の伝統もある。大阪から妙見山までは能勢街道で結ばれており、さらに北の丹波亀岡(京都府亀岡市)にも通じている。山あいの町として孤立しているようでありながら、都会との縁は保たれているのである。そして、浄瑠璃語り(義太夫節)が郷土芸能として愛され、浄瑠璃の本場である大阪からの影響を受けつつも、適度の距離があることで「能勢の浄瑠璃」を独自の文化として保持せしめたのである。

2020年11月末の時点で世帯数4578、人口9723人という小規模な町ながら、町には見事な水田が広がり、収穫される米は「能勢米」と呼ばれる。ほかにも多くの農作物や特産品(栗、マツタケ、清酒、炭など)があり、それらは平尾悦子氏作『能勢三番叟』<sup>2)</sup>にも、この土地の風俗とともに誇るべきものとして描かれている。この豊かな自然によってはぐくまれた独自の文化は「能勢 浄瑠璃の里」として2007年にサントリー地域文化賞を受賞している。

能勢の浄瑠璃は、江戸時代以来二百年数十年の歴史を持ち、竹本文太夫、竹本中美太夫、竹本井筒太夫の三派(その後、竹本東寿太夫派ができる)

の太夫が語りを伝承してきた。そして、町ではそのコンテンツを活性化し、文化の香り豊かなまちづくりを目指すべく立派な劇場を建設した。そのうえで、文楽人形による劇団を結成して、義太夫語りと一体となった本格的なアマチュアカンパニーを設立することになったのである。しばしば「ハコモノ」と揶揄される会館の建設は全国に数多く見られるが、この町では「カンパニーを含む劇場」というコンセプトで建設された点が斬新だったのである。1993年にオープンしたこの会館は「能勢町ふるさと会館」を正式名称としたが、むしろ愛称の「浄るりシアター」として広く親しまれることになった。町の挑戦はさらに続く。そのカンパニーの活動を、ほかの地方の文楽人形劇団と一線を画すものとするために、古典の浄瑠璃作品を上演するのみならず、新作浄瑠璃を公募して大阪の文楽座の技芸員の協力(作曲、技芸の指導、演出など)を得ながら上演するという、山あいの小さな町としては壮大ともいえる計画を建てられたのであった。

浄瑠璃の募集は、1996年に迎える能勢町の町制施行40周年記念事業として、1995年7月から10月までの間におこなわれ、浄るりシアター開館5周年の1998年の上演を目指して進められたのである。拙作『名月乗桂木』もその募集に応じたものである。

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2020年9月4日

## 1. 上演までの経緯

全国各地の20代から70代という幅広い層から69編の作品が集まり、すみやかに審査がおこなわれた。当初は、演出家の大橋也寸、文楽の七代竹本住太夫（選考委員長）、五代鶴澤燕三、三代吉田簀助の各氏が審査に当たられる予定であったが、鶴澤燕三氏は病気で倒れたため、同じ文楽三味線の鶴澤清介氏が代わられた。

1995年12月までの第一次選考で10編が選ばれ、翌年3月には3作に絞られた。しかしいずれも上演するには課題があるとのことで、4月10日に国立文楽劇場（大阪府中央区）でミーティングがあり、その後、指導を受けた作者3人は書き直しを提出、それをもとにして同27日に受賞作が決定（拙作『名月乗桂木』）、表彰式と制作発表会見は同30日に大阪市内のホテルで行われた。その後さらに上演用に書き換えがおこなわれ、難産の末、台本は完成したのであった（詳細については本稿末に改めて記す）。

そして鶴澤清介師の作曲によって浄瑠璃としての体裁が整った作品は、1996年6月16日に文楽座の竹本千歳太夫、鶴澤清介、竹澤宗助各師による素浄瑠璃（語りのみ。人形は付かない）で初演され、その後、人形制作、運営方法の検討、大道具、小道具、衣裳（人形に着付けるもの）などの制作、音響、照明などの検討を重ね、さらには人形劇団員の公募とオーディションもおこなわれた。人形劇団は主に吉田簀太郎（現・三代目桐竹勘十郎）、吉田簀二郎、吉田簀一郎各師が指導に当たられた。そして1998年6月に「能勢人形浄瑠璃・名月乗桂木」として浄瑠璃シアターで上演されたのであった。なお、劇団はその後「鹿角座（ろっかくざ）」と名称を決めて現在に至っている。

その後、『名月乗桂木』は、演出を練ったうえで浄瑠璃シアターで繰り返し上演され、森ノ宮ピロティホール（大阪府中央区）の舞台にも上げられた。そして2020年6月にも浄瑠璃シアターで上演されることが決まっていたが、SARS-CoV-2（新型コロナウイルス）の感染拡大のため、8月に延期され、さらにその後もウイルスの収束が見通せず、稽古もできない状況が続いたために中止されるに至った。しかし、浄瑠璃シアターの企画制作陣が手を拱いているはずがない。早速、動画共有サイトYouTubeにおいて鹿角座の他の演目とともに2020年7月18日から全編の配信が始まったのである<sup>3)</sup>。

上演台本に関しては、上演のたびにプログラムに掲載されていて広く知られているものなので、必要があればそちらを参照していただきたい。以下に掲載するものはオリジナルの応募作であり、その内容は、審査員の要望に応じて書き換えたものとも、さらに審査員との相談のうえで加筆された上演台本ともかなり異なっている。

## 2. 作品の主題と構想

この作品のタイトルの読み方は「めいげつにのせてかつらぎ」で、「名月があってこそその能勢」という意味をこめて「のせ（能勢）」を隠してある。そして主題は、能勢の町と人の弥栄を祝福することにある。

能勢はすばらしい町ではあるが、人の心に何か行き違いがあった時には、そのすばらしさも見失われるであろう。この芝居の冒頭では、能勢の町は雨続きで、そこに暮らす人たちの心も鬱屈している。野間の大げやきもあたりまえのようにそこにあるため、誰もそのありがたみを意識していない。しかし人々の苦悩を解決してくれるのはやはりこの町の自然そのものなのである。

「大げやきの段」で描いたのは、幹まわり約13mで樹齢1000年ともいわれる「野間の大げやき（能勢町野間稲地。旧蟻無神社の神木。国の天然記念物）」に集まる人たちで、ここで彼らは悩みを打ち明ける。それを背後でじっと聞いているのがこの巨木なのである。最初に、実につまらないことでいがみ合う母、息子、その妻の三人。そしてなぜか息子が「今夜名月峠に月が出たら和解しよう」と言い出す。この唐突な発言はたしかに息子の言葉なのだが、大げやきのささやきを息子が代弁しているとも言える。

もう一組は将来を約束している若い男女。長雨のせいで農作物の不作に苦しんでいる人々を救うために、娘は人身御供のような形で庄屋の息子と結婚させられそうになっている。男女は、どうせ結ばれないのであればいっそ心中しようと心確かめ合う。そして最期所は「今さら申すに及びませぬ」「名月峠に行きませう」と、憑かれたように言う。こうして、大げやきの下にいる人たちは、何ものかに促されるようにして名月峠に行くことになるのである。

名月峠は現在大阪府道4号茨木能勢線の通る場所で、ここが「名月峠」と呼ばれるのは名月姫の

伝承が残るからである。名月姫の伝承は、能勢町のほかに名月姫の出身地とされる兵庫県尼崎市にも残されている。しかし内容はかなり異なっているので、簡単に紹介しておく。

まず、尼崎の伝承は次のとおり（尼崎の中でも微妙に異なる伝承もある）。尼崎の尾浜の地に、子に恵まれなかった三松刑部左衛門国春という人物が多聞天（毘沙門天。本来は大日如来と同体とされる）に願を掛けて、中秋の名月の日である八月十五日に娘を得たので、その娘を名月姫と名付ける。姫は親孝行のうえ大変な美貌であったが、能勢家包（のせのいへかね）という人物が彼女にひとめぼれして奪い去ってしまう。国春は悲嘆にくれて娘を探すが、その途中で大輪田の泊（神戸市）の修復のための人柱となる者を集めていた平清盛に捕らえられる。そのことを夢で知った名月姫は福原（大輪田の泊のある、のちに平家が都とした地）に行っただろうじて父と再会する。その後能勢に戻った名月姫は寺を造営し、さらに夫の家包が亡くなると尼崎に戻って尾浜に大日堂を建てた。この大日堂のあったところが今の尾浜八幡宮（尼崎市尾浜町）だとされる。尾浜八幡宮には今も伏蓮華を基礎石とする宝篋印塔があり、これが名月姫の墓と伝わっている。

一方、能勢の伝承は次のようなものである。尼崎の三松国春が大日如来に祈願して得た名月姫は能勢家包（苞）のもとに嫁ぎ、二人は幸せに暮らしていた。ところが彼女の美貌の噂を聞いた平清盛に召されて福原に行くことになる。しかし、夫への操を立てるべく、彼女は峠を越える時に自害して果てる。この峠は今も名月峠と呼ばれ、道の脇の少し高い位置には名月姫、父の国春、夫の家包の墓とされるものが並んでいる。この伝承があるために、能勢では嫁入りの行列や車列はこの峠を越えることを忌むともいわれる。

このように、「尼崎に生まれた名月姫が能勢家包の妻となり、平清盛に絡んだ理由で福原に向かう」という大枠は双方の伝承で一致しているが、能勢家包の扱いがまるで異なる（善良な夫なのか無体な人物か）のはそれぞれの土地柄であろう。

筆者は能勢の浄瑠璃作品を書くので、当然能勢に伝わる話を念頭に置いていた。登場人物のうち、「桂」（名は「月の桂」に由来する）という女性はこの名月姫と同じように「権力者の横暴によって望まぬ相手のもとに送られようとして、ついには名月峠で自ら命を絶とうとする」という設定にし

た。ただ、それでは救いにならないので、名月峠の名月が彼女に幸福をもたらすことにしたのである。

この「いがみ合う一家」と「恋愛に悩む男女」の二つのグループが期せずして名月峠の名月に運命を賭けることになるのだが、以下に掲載する原作では、彼らを見守るような存在としてもう二人の人物を配している。この二人の扱いについては本稿の最後で述べることにする。

この話は、以上のように能勢町の二つの名所である野間の大けやきと名月峠を舞台にして展開するのだが、実際に物語を動かしているのは物言わぬ自然そのもので、人物は文字どおり「あやつり人形」ともいえる。彼らにふりかかった難題の解決のために、大けやきが「名月峠に行け」と指示して、名月峠（に出現する名月）が「ではすべてを解決しよう」と答えているのである。もちろんそれは筆者の「思い込み」に過ぎず、観客にはそこまで理解してもらう必要はないのだが。

ついでに言うと、この話の結末は「能勢の浄瑠璃二百年」で始まる二上がり歌<sup>4)</sup>になっており、ここには能勢に伝わる浄瑠璃が全国津々浦々に広がってますます発展するように願う意味も込められている。歌の途中に「仲美はしき筒井筒、文に彩り」とあるのは、いうまでもなく「中美太夫、井筒太夫、文太夫」の三派（当時は東寿太夫派はなかった）の名を隠したものである。

畢竟、能勢の人々の幸福な暮らしは豊かな自然と浄瑠璃という地域文化に支えられている、というのがこの作品のいわんとするところなのである。

### 3 『名月乗桂木』原本文

「大けやきの段」

立ちのぼる。煙見渡すすべらきの山と山との裾野よりここも御国のまほろばと、五穀豊穰、能勢の里。里の雀の囀りに心を野辺の鷹に鈴、降り続けたる長雨も、ちよつと小止みの朝まだき。

ここに聳ゆる雨の間の、野間のけやきに佇むは、ところの若者酒屋の勘助、店の仕事もそこそこに、好きこそものの浄瑠璃三昧。今は近松、出雲に半二。見習ふ作者の一人修行。

今日も今日とて、溜息をホツと月、雪、話の種。さがし続けて思案顔。

「今頃は半七つあん。どこにどうしてござらう

ぞ、夕顔棚のこなたよりあらはれ出でたる武智光秀。アア、名人上手といふ人は、なんであないええ文章が書けるんぢやらう。持病の痰が治らず、太夫の道を諦めたこのわしの夢は、能勢を舞台に浄瑠璃作り、能勢の人が語つて、京、大坂から尾張、江戸、姫路、尾道、宮島と、千万の人の喝采浴びること。幸ひ、この里には竹本文太夫、井筒太夫、中美太夫と、三派の太夫が揃うてゐる。よい芝居さへあつたなら、舞台に上げるに事欠かぬ。何ぞ心をしめつけるやうな、あはれな話はないかいナウ」と、チツと鳴らした舌の根も乾かぬ雨を恨みつつ、出で来る在所の女房二人。姿を隠す勤助に気もつかの間の曇り空。曇り顔して見上げつつ、三日にあげぬおしやべり案山子。

「ナウ、お能さん。今年はきつい不作続き。それと言ふのもこの長雨の仕業。そもそもいつから降り続いてゐるものかいノ」

「ソレソレ、お勢さん。菜種梅雨ぢや、花散らしぢや、梅雨のはしりぢや、五月雨ぢや、果ては夕立ち、野分よと、言ひ続けてはモウ半年。今朝がた見たら、うちのまな板に椎茸が生えてゐた。アア、お天道様の男前、そろそろ拝んでみたいもの」

「お天道様も恋しいが、今日は八月十五夜なれば、お月様にも会ひたい。雨降り男か雨女、どこぞにゐるのぢやないかいナ」

「さればいの。うちの姑お熊婆。わしが誠心誠意を尽くしても、あれがいかんノ、これがどうぢやノ、と小言言うては唾（つばき）は飛ばす、言ひ返したら手のひら返し、鼻に泣きつき『鬼嫁よ』と悪口ながらの涙雨。寝たら粗相の塩辛雨。あれこそ長雨の根源よ」

「得心、得心。さりながら、塩辛だけはごめんぢやノ」と、嫁は嫁同士、羊年。めいめい不満をさらけ出す、井戸端話、長話するところへ、ニユツと顔出す姑は、親離れせぬ息子の冬吉、あとに引き連れ、したり顔。

「嫁女。お能殿。何やらわしの噂と聞いた。さだめて褒めておくれぢやノ」

と、これ生きがひの差し出口。

嫁はあたふた血の気もひいて、

「ハイ、アノ、ソリヤモウ褒めて褒めて、褒め殺し。イヤイヤ、褒めころがしてをりました。ナ、さうでござんしよ、お勢さん」

「ソ、ソ、その通り、その通り。アノ、お熊様。嫁姑の諍ひは古今東西上下左右、絶えぬものと言ひますが、お前はいかい果報者。お能さんこそ三国一の優しい嫁。何でこれほど優しくて分別豊かな

器量よしが、甲斐性なしの冬吉の嫁になりやったかと、巷でもえらい評判。アノ甲斐性なしの、アレ、そこにゐやるは冬吉さん」

と、藪をつついて出すものは、口は災ひ、蛇（くちなは）と気付くも遅き恐ろしさ。

お勢は何の言ひ訳も叶はぬものと身を翻し、

「急ぎの用がござんした。皆さんごめん」

と、逃げ足の端山繁山（はやましげやま）、繁れるけやき。あとに残して、駆けり行く。

お熊は嫁を見据ゑつつ、

「ヤイ、嫁女。最前から一部始終は聞いてゐた。年はとつてもこの耳は、悪口だけは逃しはせぬ。何ぢや、雨の止まんのはこの婆（ばば）がせむぢやと。よくもそんな悪態ついたな。名誉毀損で訴へるぞよ。ええか、雨が降るのも血が赤いのも鯨（なまず）の髭が長いのも、みんなお前が悪いのぢや」

「鯨の髭。コレ、女の古うなった姑様。ソリヤあんまりなおつしやりやう」

「ヘン、あんまり、と言ふなら、こつちも言ひましょ。お前、この間、わしが嫁に来た時から、大事に大事に使うてゐた鍋釜を断りもなしに捨ててしまつたであらう。さういふ了見で嫁のつとめが果たせるか」

「あれはもう底が抜けて使ひものにならぬゆゑ、納戸に突つ込んであつたもの」

「突つ込んであつたんぢやない。しまつてあつたんぢや。そもそも、底が抜けたくらゐで、使ひものにならんとはけしからん。今はリサイクルの時代ぢやぞ」

「さうおつしやるなら、あの鍋釜で猪鍋（ししなべ）作つてみなされ、飯（ま）炊いてごらんなされ」

「口答へのきつい嫁ぢや。ア、猪鍋で思ひ出したが、お前の料理は辛うていかん。塩にからしに山葵（わさび）に生姜、なんぼほど使うたら気が済むのぢや。年寄りに辛いもんは毒ぢやといふに。ハハア、お前、わしを早死にさせる気ぢやな。コリヤ、親殺し。本性見えた。今日限り縁切つた。去つたぞよ」

「縁切つた、去つた。チヨツト冬吉つあん。ボヤツとしとらんと何とか言うて下され」

「冬吉。嫁御のお望みぢや。はつきり去ると言うてやりや」

対岸の火事飛び火して、かかる火の粉に冬吉はウロウロタジタジ。

「モ、毛ほどのことから縁切るの去ると言ふまでよう広がる話ぢや。わしは去らうが去るまいが、モウどつちやでもええ、ただ、めんどくさいこと

だけはごめんぢや。元をただせば日本一の名月も台なしにするこの長雨の罪。ム、名月、長雨。フン、そんならかうしませう。今宵の五つ時に名月峠に月が出たら、母者人はお能を許す。もし出なんたらお能は去る。運を天に任せた評定。これで互ひに五分と五分」

と、苦肉の策も空模様、晴るる気配も見えざれば、お熊はにんまり。

「さすがは冬吉。名案ぢや。こりや、お多福。亭主の言葉、モウ逃げられぬ。へへ、最前天気予報で聞いたところでは、今宵の降水確率は九十パーセントぢやげな。へへへ……。ヲヲ、また雨ぢや。瑞相、瑞相。サ、うだうだと無駄口たたく暇があるなら、早う戻つて朝餉の支度、ちやつきりとするがよい。今日は何やら村中の年寄り衆集めて相談事、と、今しがた庄屋さん方から知らせがあつた。うちかたの親父様も早う出らるるゆゑ、戻りや、戻りや」

と、含み笑ひに居丈高。

お能は亭主を睨みつけ、

「冬吉つあん、これでは勝負にならぬぢやないか。さてはお前も私を嫌うてぢやな」

「と、と、とんでもない。ナ、さう怖い顔せずに、今宵の五つ、名月峠に行きませう」

手に汗、冷汗、脂汗。亭主にかかるとぼしりは、齒牙にもかけぬ嫁姑。顔をそむけてお互ひに舌をペロリと出しじゃこの今朝の汁物、常よりも苦うて辛（から）き思ひを胸。意地をはるかな空見上げ、三人ながら帰り行く。

あとに勘助立ち出でて、またもため息。

「嫁姑のいさかひか。怖いもんぢやナウ。ムウ。あれが浄瑠璃の種になるか。イヤイヤ、あれでは端場がよいところ」

と、ひとりごちたる折りからに、雨を通してわらべの声。どこで歌ふか、手毬唄。

テンテンテンガナ。テンテンガナ。手毬つきつき、望月の夜は兎も餅を搗（つ）き、桂の木蔭に休らうて、たばこ一服するがよい。峠の月の月見草、今宵話の種を蒔く。テンテンテンガナ。テンテンガナ。

「アリヤ、何ぢや。この雨の中、どこで誰が歌ふのやら。何ぞわけがありさうな」

と、思案重ねて、降る雨もかまはぬ風情。けやきの蔭に、またまた。

入相の鐘もけぶれる夕まぐれ。萩の上には行く雁

の涙にまがふ白露の置きまどはせる恋模様。空の模様はまた雨のふり分け髪も肩過ぎて、神も仏も涙する娘桂は十九の秋。翡翠（ひすい）の鬢（かづら）、桂の眉、もてあましてあまりある。見目は果報の基（もとゐ）とは誰（た）が言ひそめし絵空事。

あと追ひかけて出で来るは、井筒にかけし若男。やがて夫婦と約束の、名は周作と堅けれど、油壺から出すやうな粹な心に甘い顔。

けやきのねきに追ひついて、「コレ桂。わしに話があると申すおきながら、何も言はずに逃げ出すとは、どうしたことぢや。サ、遠慮せずと申すてみや」

と、やさしき中にも凜（りん）とした言葉にかへつて伏し目の娘。

「申すて楽しい話なら、すぐにもお話しませうが、さうでないから言ひ澁（よど）む心とお察し下さつて、しばし御猶予なされませ」

「コリヤ、わしとしたことが、せきたてて悪かつた。が、苦しみも悲しみも分け合ふための我らでないか。いつもの明るい桂らしう、はつきり申すてみたがよい」

「サア、さう言はれても、今しがた見た父さんの憂ひ顔。それを思へばためらはれ、どのやうにお話しすればよいのやら」

「晴兵衛殿の憂ひ。一体何のことぢや。何があつたのぢや。モウ猶予せぬ。話しやれ。エエ、うぢうぢしても始まらぬぞよ」

周作、不安に耐へかねて、言葉荒らげ詰め寄れば、「その子細、わしが話さう」

と、張りのある声先立てて、娘を思ふ闇深く、義理にも堅き父晴兵衛。

「桂がためらふ話なれば、わしとても舌が鈍る。が、ありやう話すゆゑ、よう聞いてくれ。今日は朝から庄屋さん方で寄り合ひがあつてノ。この長雨で不作続き。何ぞよい手だてはないものか、と半日かけての談合。誰ぞの祟りか狐の仕業か、奉幣せうか、赤馬出すかと、雁首並べて思案する折しも、大坂の何とかいふ祈禱坊が偶々（たまたま）近くを通りかかつたとかで招き入れられ、庄屋殿がもの問はれたところ、『龍神様のお告げ』と申すて、『庄屋殿の惣領息子にはまだ嫁があるまいがな。早々に縁談まとめて祝言すれば、村は安堵。神は人の声を聞きたまふものなれば、雨も地震もたちどころに失せませう』と、まことしやかな言ひやうに、年寄り衆は喜んで、『そんならお庄屋様。晋吉殿の

嫁探し。早速にお進め下さりませ』と、溺るるものの縄(すが)る藁(わら)。いつのまにやら話をついた」

「それは上吉。あの晋吉といふは、私と同年でござりまするが、庄屋の息子といふことを鼻にかけ、何でも思ふままになると傍若無人。権利ぢや権利ぢやというて責任をないがしろにする奴なれば、嫁のなり手が無いのも道理。それがどうやら決まるなら、いつそめでたい。シテ、その花嫁御寮はどこの物好き」

「サア、物好きかどうかは知らぬが、ホレ、お前の目の前にあるワイ」

「目の前、目の前。もしやその女子とは」

「いかにも、桂のことぢや」

と、聞いて周作仰天し、

「桂のこととおつしやつたか。コレ、桂。お前は承知などしてをらぬナ。親父殿、軽口でござりませうナ」

「イヤ、冗談でない。その御出家の言はるるには、『晴るるを願ふは月の出るのを願ふに同じ。されば、嫁になるのは卯歳生まれの、月に縁ある名の娘がよい』とやら。卯歳と言へば今年十九、月の縁と言へば、光、影、雁、すすき、桂」

「何と」

「サ、サ、そこまで言はれたら、皆の衆も気の毒さうにはしてゐたれど、たつた今賛成した手前、『桂を嫁に出してくれ』と言はざる得まい。また、わしとても不作に悩むは同じこと。どうして断ることができやうぞ。しばらく考えたい、と言うてはみたが、『今宵のうちに空が晴れ、月が見えねば、引き受けてもらふしかあるまい』と説き伏せられて来たワイノ」

周作サツと色をかへ、

「親父様。そのお考へ、あまりにも時代遅れでござりませう。サウ、この里に残る名月姫の言ひ伝へ、お前様に申すのも釈迦に説法なれども、思ひ出して下さりませ。能勢家包(のせのいへかね)の妻として静かに暮らせし名月姫。それを承知で、よこしまな六波羅の大臣平清盛公、姫の美しさに心奪はれ給ひ、理不尽なるお召し。日夜の嘆きの、そののちに、姫はやむなく都へと旅立ちたまへど、その道すがら操守つて悲しき自害。それとこれとをひとつにするのもいかなれども、女の心を顧みず、無理強ひしたる嫁入りなれば、どこやら似てはるませぬか。お前の大事の娘御に名月姫の悲しみを繰り返させてよいものか。雨が降るのは天

の営み。誰が誰と祝言せうと、晴れやうはずもありません。いかに御出家のお教へでも、そのやうな妄(みだ)り言にまどはさるるとは、親父様とも思へませぬ」

「いかにも、いかにもあり得ぬことなれど、ここまで長雨が続いたのでは、年寄りの衆の憂ひももつとも。この能勢の地は、作物の恵み豊かな里なれど、それもこれも土と水とお天道様のお蔭。そのお天道様がかうも長らくお見えにならねば、鯛の頭も信心と、どんなことでもせうといふ気持ち。まんざらわからぬものでもあるまい」

「お言葉ながら、そのために現在の娘に憂き目を見せて、後ろめたうはござらぬか」

「さうは言うても、もしこの話を断つて、なほも雨が続いたらどうなるぞ。庄屋殿に恥かかせた上、村の衆を裏切つたとて、村八分は必定。さうなりや、お前と桂との祝言も叶はぬぞよ。なるほど、お前の言ふことは正論。ぢやが、正論だけで世は渡れぬ。清と濁とを合はせ飲む分別するの年功」

と、論せど聞かぬ若気の周作。

「功、とおつしやつたか。我が子を人身御供にすることがなによゑ手柄と言へますのか。それでも親と胸張れますか」

あまり厳しき言ひやうに、桂は耐へかね、

「周作さん、そこまで言うて下さるのは、まぎれもないお前の真心。桂は嬉しうございます。が、父さんのアノ苦しげなお顔。額の皺(しわ)がまた深うなつた。一人娘のこの私を、それはそれは深う慈(いつく)しみ、厳しう育てて下さつた、その父さんが、ここまでおつしやるやりきれなさ。どうか、わかつてあげて下さりませ」

と、父と子の情けにかけて訴ふる心の誠に周作も、

「それは、それは」

となづみける。あとに何をか言ふべきと、三人ながらしばしの沈黙。心と心と心との中に雨雲たれこめて、しのび泣くこそ道理なれ。

周作、大きく息をつき、

「親父様、言葉が過ぎました。お許しなされて下さりませ。が、私にはやつぱりわかりませぬ。いつまでもそのやうな悪しき習はしにとらはれてゐて、人の幸せがありませうか。万人の幸せとは、一人一人の幸せの積み重ね。とすれば、一人の不幸は万人の不幸になりませぬか」

「周作、そこまで娘のことを思うてくれるお前には、なんぼ頭を下げてでも足りはせぬ。また、お前

の言ふことは何も間違うてはをらぬぞよ。が、わしはモウ、生一本に信念を通すには歳をとりすぎた。これと信じて進まうと思ふと、いろんなしがらみが見えてきて、つい二の足を踏んでしまふ。それを分別の才知のと言ふ人もあらうが、今のわしは、その才知がかへつてうらめしい。いづれ、お前ら若い者が、この村を引つ張る日が来たならば、どうか今の心を失はず、住みよい村にしてくれよ。わしら年寄りには、まだそれだけの勇気がない。娘をいとしがらぬのではさらさらないが、この仕儀だけは勘弁してはくれまいか」

「ととさん」

「娘」

「親父様」

「息子よ。エエ、忌まましいこの雨」

傘で隠した顔と袖、濡らすは雨か涙かや。手を取り合うて晴兵衛、桂、周作ともにうなづいて、心々を通はせり。

涙拭うて、晴兵衛は二人の肩を撫でやつて、あとは二人の心次第、目にも言はずばかりとて、とほとほと帰る行く。

あとに周作、切る口火。

「ナウ、桂。わしは最前、何の気もなく名月姫の話を持ち出した。が、今はそれがどうにも心に引つ掛かる。お前はどうかや」

と、問ひかくなれば、桂もそつと目を見開（あ）け、「私もちやうど同じこと、さつきにから思うてをりました。名月姫は一人の旅立ち。私はお前と二人なれば、何の悲しいことがござりませう」

「さらば、覚悟を」

「極めてみます」

「我らが最期となる場所は」

「今さら申すに及びませぬ」

「そんなら、桂」

「周作さん」

「名月峠に行きませう」

もはやふたつに別れ得ぬ、心と心確かめて、ひとつ蓮の上さして、暮れ行く道もものかはと、手を取り合うて急ぎ行く。

けやきの蔭より飛び出す勘助。日がな一日、浄瑠璃の思案続けてあたりしが、二人の話を立ち聞いて、怒り心頭、身をふるはせ、

「アノ、庄屋方の甚六め。わしは疾（と）うに見通した。かねてから横恋慕してゐた桂さんをどうでも我がものにせんと、巧みに巧んだことならん。エエ、思ふままにはさせぬぞよ。さりながら、今

は何より二人を追うて、命助くるが第一。周作、早まるな」

と、駆け出さんとするところへ、庄屋の惣領晋吉が酒の仕業の赤ら顔。ふらりふらりと立ち出づれば、勘助マ一度、身を隠し、耳そばだててあたりけり。晋吉何の気もつかず、

「へへ。うまいこといつた。麓の村の禅寺で本堂使うて賭場開き、和尚にあらはれ追ん出された賭け仲間のなまぐさ坊主。銭をはづんで芝居させ、大坂中に知られたる祈祷坊と偽つて、年寄りめらを欺けば、よつほどこの長雨が恨めしいと見えて、コロツと騙されけつかつた。明日には桂は俺が女房。さうなりやあとは雨が降らうが嵐にならうが、知つたことではないワイヤイ。高砂や、この浦舟に帆をあげて。アハハ……」

と、声高に内緒話をふりまいて、我が家をさして、千鳥足。

勘助、ハタと手を打つて、

「聞いた、聞いた、しかと聞いた。これで証拠が手に入った。アノ、道楽息子め。必ず報いを受くるぞよ。オツト、かうしてはゐられぬ。今は周作、桂の二人。助くることが先決」

と、足踏み出せば、どこやらに、またも聞こゆる手毬唄。

テンテンテンガナ。テテンガナ。手毬つきつき、望月の夜は兎も餅を搗き、桂の木蔭に休らうて、たばこ一服するがよい。峠の月の月見草、今宵話の種を蒔く。テンテンテンガナ。テテンガナ。

「アリヤ、また主知らぬ手毬歌。フウム。望月の夜、桂、峠、話の種。聞こえた。これぞ辻占、ありがたや。合点がいつた」

と、胸を張り、喜び勇んで。

「山路より名月峠の段」

追うて行く。

野間の里より名月峠。雨のシトシト降る中を、一里の山路、闇夜の道。はるかに照らせ山の端の月、と思へど叶はざる、険しさ不気味さ、その中にゆらゆら揺らめく手提灯。物を思へば我が身よりあくがれ出づる魂（たま）かとぞ見ゆることこそはかなけれ。

息を切らしてお熊婆。三步離れて嫁お能。仲がよいやら悪いやら、顔を見たなら喧嘩もするが、それが悩みのはけ口となつてゐるとも気づかずに、

離縁ノ何ノと、かしましし。

お熊、大きな息をつき、

「ハア、ハア。名月峠はこない遠かつたかいノ。前方（まへかた）ならケンケンしてでも、チヨチヨイのチヨイ、と行けたもんぢやが。それに何とも寂しい道ぢや。わしほどの美貌の女が一人歩きしてゐたら、夜盗、山賊に襲はれはせんかいノ。アア、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

「フン、どこの山賊がこんな梅干を襲ふもんか。あぶないのは、わしのやうにツヤツヤした肌の、妙齢の女郎花（をみなへし）。アア、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

「なんぢや、女郎花。へへ、女郎花が聞いたら飛んで逃げるワイ。それにナ、妙齢といふ字は、妙な年齢と書くんぢや。ヤイ、お多福。お前が大口たたけるのも、あの峠までの道のりだけぢや。それ忘れな」

と、タラタラ厭味。このごろそつくり似てきたと村の評判。嫁姑。またも夜道を歩み行く。

それに続いて、周作、桂。これは二人の死にどころ、求めて登る山路の露。はかなく消ゆることばかり、重き心の相々傘。

周作、今は気も落ち着き、

「不思議なものぢや。ここへ来るまで庄屋殿や、息子の晋吉、年寄り衆まで、憎み続けてきたけれど、今は誰も恨みはせぬ。そなたと二人で浄瑠璃浄土かけて行くなら本望。よしんば地獄に落つるとも、それもものかは、我らが業。名月峠はあと少し。ついて来いよ」

と励ませば、桂はコツクリうなづいて、言葉はいらぬ世なりけり。

ややあつて酒屋の勘助。心は前に走れども、持病の咳に悩まされ、足の進まぬ苛立ちに、齒がみ、足ずりするところへ、桂の父親晴兵衛も、婿に預けし娘の命、さすがに親子恩愛に、まなこ配りてさしかかる。

晴兵衛、人の気配を感じ、

「そこにゐやるはどなたぞ」

と、問へば、勘助目を凝らし、

「晴兵衛さんか」

「その声は勘助。こんなに遅うどこへ行く。お前の病ひに冷え気は毒。早う帰つたがよいぞや」

「ご心配かたじけない。が、人の命にはかへられぬ。さういふお前も娘御と大事の婿殿を案じての山歩きではござりませぬか」

「いかにもさうぢや、が、どうしてそれを」

「さればこそ、お前様の苦しみから、アノ晋吉のたくらみまで、私はすべてを知つてゐます。話は道々。行く先はアノ名月峠」

と、病ひ持つ身と老いの身のあやしき足元、労（いた）はりつ、労はられつつ、久方の名月峠に。

着きにけり。

一番手には姑お熊。相も変はらず、三步遅れて嫁お能。登る山路の険しさに、足取り重く、いびる気も、口答へする勢ひも、萎え衰へて、口数はともに少なくなりけり。

「コレ、嫁女。名月峠に着いたぞよ」

「いかにも、着きました。ナア」

「アノ、ちよつと聞いてみる、だけぢやが、お前、今からでもあやまる気はないか」

「と、おつしやると」

「サア、朝方は腹立ちのあまり、すぐにも離縁すると言つたれど、お前の心かげ次第では、許さん、でもないぞよ」

気弱になるは老いの常。ここで素直にあやまれば、円（まる）う収まることなれど、まだ張り合ひの意地残る嫁は返事もせざりけり。

「これほど言うてもあやまらぬか。あやまらぬな。そんならやつぱり五つの鐘を待ち聞いて、月見ることせうかいノ」

と、これも素直になれぬ婆。二人ながらに路傍の石、顔を背けて腰下ろす。

続く男女は周作、桂。身は此の岸にありながら、心はもはや彼岸の歩み。

周作、桂をいたはつて、

「半時かけての山路歩き。きつう疲れたであらうナア」

「イエエ、周作さんと二人なら、疲れも悩みもありません」

「嬉しいことを、ありがたい。それにつけても、未だ十九の若い身空で、かうして最期を遂ぐる。まことに後悔致さぬか」

「この期に及んで何の後悔。とは申せども、ごの夕暮れの心の揺れはさすがになのめならぬこと。晋吉さんとの祝言話を聞いた時、私の心を知りながら、あんまりひどいお話と父さんを恨みに思ひ、お前を語りひ駆落ちか心中するとの思ひ込み。さりながら、とかくの話聞くうちに、父さんのお立場がようわかつた。その上、私が心中したなら、あとに残つた父さんは己が責めとさいなまれ、世間からも後ろ指。よもや生きてはゐられますまい。



そのやうな親不孝、私の本意（ほい）にはあらぬこと、と思ひ返して晋吉さんに嫁ぐ覚悟。さうしてけやきの木の前で三人寄つて語りしに、一本気なお前に責められ、じつと耐へてゐられた父さん。つひには何もおつしやらず、好きなやうにするがよいと優しい目で知らせて下さつた。その御心の大きさ深さを惑じ取り、私ごとき小娘が、父さんの御心を付度（そんたく）するなどおほけないことと身にしみました。これまでずつと親不孝の限りを尽くしたこの私。最後にマ一つ父さんの御厚情を真に受けてこのまま死なせてもらひます」

と、積もる思ひを打ち明くる。

周作、ほとほと感じ入り、

「よう言うてくれたナウ。今の言葉でこのわしも、心のほだし、消え失せた」

と、語らふ二人に気もつかず、お熊、お能は身を寄せ合ひ、いつの間にやら居眠つて、何の夢見ることならん。

やうやう追ひつく晴兵衛、勘助。遠目の人影、なりかたち。周作、桂と見て取つて、

「ヤア、勘助、間に合うたぞ」

「よろしうござつた。サア、行きますせう」

「アアコレ、ちよつと待つてくれ。まだ何やら二人してしみじみと話してゐる。あの様子では、お初徳兵衛心中にならうて、今宵の鐘の音を極楽浄土の引導と聞き納めんとの覚悟ならむ。それまで二人の心根をそつと見てゐてやりたい」

「なるほど。そんなら、鐘の鳴りやむ時に飛び出しますせう」

と、一步二歩、近づくとこで身を隠す。

周作、なほも名残りの話。

「うちの親父もお袋も、気立てのよい世話好きのそなたと暮らすこときつう楽しみにしてゐた。さうさう、いつぞやあの頑固親父が言うてゐた。『わしはまだまだお前なんぞに、何ひとつ負けはせぬ。が、たつたひとつ負けたのは、嫁のよしあし』。そんなら横から母者人、目くじら立てて、イヤ、目を細めて笑うてゐた。ハハハ……」

「ホホホ……」

「アア、お月様は今ごろどのへんにゐてござるかナウ。今宵のうちに月が見えたら、晋吉との縁談は変改（へんがい）になり、わしらは晴れて夫婦のはず。夢ぢや、夢ぢや」

夢かうつつか思ほえず、あたり見回し、周作は、松の根元に立ち寄つて、

「やがて五つの宵の鐘。それを合図に二人して、こ

の松の木の枝となる。用意せん」

と、さし寄つて、帯スルスルと解きほどき、互ひに取り替へ、枝と枝、ハラリと引つ掛け、結び松。結ぶ心のせつなさよ。

「桂、おぢや。二人揃うて念仏せう」

と、膝寄せ合うて両手を合はせ、目を閉ぢてこそゐたりけれ。

生き別れ、死に別れよと促すは、宵も深まる五つの鐘。寂滅為楽と響くとは、げにこのことと知られたり。

周作、そつと目をあけて、

「これ見納め」

と、提灯を差し上げ、桂の顔照らす。この美しき吉祥天女。見苦しからぬ最期を、と、心に願ひ、髪撫づる。

時しもあれ、秋の夜寒に身を冷やす勘助、グツと咳込めば、

「南無三、人」

と、驚く周作。提灯サツと吹き消して、

「今が最期」

と、女の手を取り松の根元の岩の上。枝に垂らせし帯引き寄せ、互ひの首に掛け合うたり。

晴兵衛、勘助、目を合はせ、

「すは、一大事」

と、飛び出し、飛び出し、駆け寄れども、闇にまぎれて二人（ににん）の居どころ、右か左か前後（まへうしろ）。目当てもつかず戸惑ふところに。

折りから激しき一陣の天つ風吹き、鐘の音もかき消されては、また吹き返し、三返り、四返り、果てしもあらず吹きすさべば、お熊、お能は目を覚まし、あちらにウロウロ、こちらにも、うろたへまはつたそのあげく、松の根元に抱き合うて身を震はせてゐたりけり。

周作、桂は必死の形相。

「この帯放してなるべきか」

と、力をつけて、手に手を取り、身を踊らす末期の苦しみ。

なほも激しき疾風に、さしもの大木ゆらゆらゆら、揺られ揺られて枝はポツキリ真つ二つ。投げ出されたる周作、桂。お熊、お能におつかぶさり、四人はともに絶え入つたり。

やがて静まる秋の風。空の雲まで吹き散らす。あとに姿を見するのは、黄金の色に冴えわたる名月峠のその名月。

勘助やうやう面（おもて）を上げ、ハツと気付いて、

「月ぢや、月が出た。お月様のおでましぢや」

と、叫ぶに驚く父晴兵衛。  
「ホン二月ぢや。桂、周作。大事ないか」  
と、あたり見回すその先に、月の光に映え出づる、二人の姿。勘助ともに駆け寄つて、  
「桂、桂」  
「周作」  
と、力つくれば、二人はともに、  
「ウン」  
と、ばかりに息吹き返す。  
「よかつた、よかつた、助かつたぞ。二人とも、モウ何も案ずることはない。ホレ、あの空を見や」  
と、晴兵衛が指さす彼方に目をやつて、  
「アレ、月ぢや。桂、見えるか、満月ぢや」  
「見えます、見えますとも。ホンニマア、美しい仲秋の名月」  
「二人の願ひが名月姫に届いたか」  
「そんならお前と私とは」  
「晴れて夫婦の盃ぢや」  
と、胸の曇りも晴れわたり、しつかと抱き合ふ、足元より、  
「痛い、苦しい、重たい」  
と、うめく声。周作、桂は驚いて、何者ならんと飛びのけば、お熊、お能も九死一生。ムクムクムクと起き出づる。  
「誰ぢや、つけもん石みたいに人の身体の上にドスンとのつかつてきくさつて」  
「アア痛。雨は降るは、風は吹くは。モ、今日といふ今日は暗剣殺に向かうたやうな」  
と、言ひつつ互ひに顔見合はせ、  
「なんぢや、提灯もないのに、このお多福の顔がえらうはつきり見える」  
-「なるほど、お前のお顔の皺までも一本づつよう見える。アア、つ、つ、月ぢや」  
「エエ、月。アア、ほんまぢや、月が出てる。マ、芝居の書き割りみたいにきれいな月ぢやナア。ム、月が出たと言ふことは、お前はやつぱり今まで通り」  
「嫁と呼んで下さりますか」  
その一言に姑も目元ゆるんで、  
「言ふまい、言ふまい。ほんまのこと言うたらナ、わしはいつもお前のことを頼りにしとるんぢや。堪忍してくれ、嫁女」  
「母上様。私もほんまはお前のことを女の鑑（かがみ）と思うてをります。今度いつペン、底の抜けた釜で、飯を炊いてみませう」  
と、とけあふ心、嫁姑。同じ女子といふだけで、

いがみ合ふのも常ならば、同じ女子といふだけに、仲直るのも易きこと。  
望月の光明るくあたりを照らし、六人それぞれ顔見合はせ、  
「アレ、周作さんに桂さん、そつちにあやるのは晴兵衛殿に勘助さんか」  
「さう言ふお前らは、お熊さんにお能さん。こんなところで何してござる」  
「さういふお前も」  
「そなたらも」  
「ハハハ、モウよいではないか。いろんなことがあらうけれど、お月様さへお出ましならば能勢はやつぱりよいところ。出来た、出来た、上出来ぢや」  
と、喜ぶ晴兵衛。  
勘助も、  
「出来た、出来た。これこそ能勢の浄瑠璃ぢや。恋も実つて、作物もやがては実る大豊作。この幸せを秋津島六十余州に伝へたら、拍手喝采疑ひなし。晴兵衛殿、周作、桂さん、お熊さんにお能さん。世にこれほどの嬉しさが、またとあらうか出来やうか。心は晴れて、身も晴れて、明日は定めて日本晴れ。まことにめでたうさぶらひける」  
「そんなら揃うて帰らうか」  
と、六人ながら峠の道。難儀の峠も越え果てて、輝く光、輝く明日。老いに若きに、男に女。この名月に。  
能勢の浄瑠璃二百年。三百、五百、千歳の松。北はみちのく三千歳（みちとせ）に、南、東（ひんがし）、津々浦々。西は八代、八千代まで語り継がれて万代（よろづよ）の後に伝ふる久方の天照りわたる名月の桂、周作、恋模様。仲美はしき筒井筒、文に彩り、栄えある。里と人こそめでたけれ。

#### 4 原作から上演台本へ

最後に、この作品の上演経緯について補足しておく。

浄るりシアターが作品を公募した時、規定枚数は「400字詰め原稿用紙60枚以内」<sup>5)</sup>であった。しかし、浄瑠璃作品で60枚というと上演には優に3時間はかかるものと思われ、語り、人形ともにプロの演者でなければ上演は困難に思われた。アマチュアによる上演が計画されていたことは知っていたので、筆者は90分の上演時間を限度と見て、原稿の分量もあえてその半分に抑えることにした。実際、上に掲げた原作はおよそ400字詰め30枚のもの

のである。

ところが、前述の文楽劇場でのミーティングと上演決定後の審査員との書き換えの話し合いの過程で、話を単純化して短いものにするという構想が提示され、大幅なカットが求められた。その際の審査員のアドバイスも含めて再考した結果、晴兵衛と勘助の二人の人物を完全に省いてしまうほかはないという結論に至った。必然的に「大けやきの段」における桂と周作のやりとりも「愁嘆場」とは呼べない程度にまで短くすることになり、全体的に喜劇色を強めるような変更をおこなったのである。その結果、分量は原作の6割程度にまで短くなり、上演時間は60分弱<sup>6)</sup>が想定されるものになったのであった。ただ、もう少し「愁嘆」の要素を残しておくべきではなかったかという若干の後悔がある。

本来筆者は、病気のために浄瑠璃太夫になる夢を諦めた勘助という人物が浄瑠璃作者になりたいと考えて地元の人たちを観察し、最終的にそのアイデアがまとまる、という内容を話の枠組みとして設定していた。そして、彼が観察した人々の暮らしを次々に入れ子のように描いて、やがてそれが浄瑠璃そのものになっていくという形を取ったのである。それだけに、この大枠をすべて取り払ってしまうことは不可能ではなく、個々のエピソードをつないでいけば話としての体裁は整うのである。筆者は主要な六人の登場人物を二人一組で動かすように考えていたが、その場合、勘助とセットになるのは晴兵衛という人物であった。そこで勘助を省いた場合、晴兵衛の存在もほやけてしまい、また桂と周作の愁嘆場を軽くするなら、晴兵衛も省くのが当然の帰結であった。そうなると父娘の愛情は描けなくなるが、それは諦めるほかはない。逆に、筆者があまり重視していなかった庄屋の息子の晋吉を、悪役というよりは滑稽な役回りとして前面に押し出すことになった。

これで、作品の形としては、お熊、冬吉、お能という一家の騒動と、桂、周作、晋吉の関係を並行させて、名月峠での解決につながるよう書き直すことになったのである。

本来勘助が観察するはずであった人々の暮らしは、およそ次のようなものである。

- ① お能とお勢（二人合わせて「能勢」になることはいうまでもない）。ふたりの若い妻のとりとめもないおしゃべり。その内容は、悪意はないものの、他人、特に姑の悪口であり、日

常生活の鬱屈を発散している。

- ② お熊と冬吉とお能。冬吉はお熊の息子でお能の夫。折り合いが悪い姑と嫁、面倒に関わりたくないばかりに女同士のいがみ合いから逃げようとする無責任な男。先のお能とお勢のやりとりをきっかけとして発展させた内容である。なお、お能は姑にやり込められるばかりの従順な妻ではなく、いつの日かお熊のような嫌味な姑になるかもしれない。その意味で、姑の名前は「お能」に髭が生えた（厚かましくなった）ところから「お熊」とした。
- ③ 桂、周作、晋吉。桂と周作は、お熊一家のドタバタとは対照的にひたむきな純愛の権化のような存在。桂に横恋慕するのが庄屋の息子で親の七光りで何ごとも思うままにしようとする小悪党の晋吉。すでに記したように、名月姫と能勢家包と平清盛をイメージするもの。
- ④ 桂の父親の晴兵衛。名月姫の父親の三松国春にあたる。誠実な人柄ではあるが、旧弊から逃れられずに苦悩する。

書き換えの結果、勘助と晴兵衛は姿を消した。そして、人物の性根が若干変化したのは晋吉である。原作でのこの人物は、何としても桂を手に入れるべく手の込んだ芝居をするので、小悪党という言葉が合う人物である。筆者はこの作品以後に書いたものでも権力や暴力への反発をしばしば主題としており<sup>7)</sup>、その流れに位置する人物だったのである。しかし書き換えの結果、飲んだくれで浅知恵の持ち主という性根になり、「名月峠の段」でも姿を見せたあげく、ふてくされて恥をさらすだけに終わる、三枚目になった。このように「悪」の要素が薄められた結果、後味の悪さは残らなくなり、段切ではほかの人物と一緒に踊り出すなど憎めない面も見せるのである。

「名月峠」の段では、晋吉も登場させたこともあって、滑稽味をさらに強め、最初に意識を取り戻した周作が、まだ闇の中なのでお熊を桂と勘違いするなどの笑いの要素を入れた。すっきりした段切を目指した原作に対して、笑いのうちに結末を迎える上演台本になったのである。

最後の場面は二上がり歌の曲調といい、全員が踊り出す演出といい、一切相談はしていないが、筆者の思いと作曲者、演出者のアイデアが完全に一致したものであった。

『名月乗桂木』は芝居としては稚拙なものではあるが、終演後、観客が笑顔で、幸福な気持ちになっ

てもらえるように、という願いはいくらか果たせたのではないかと思っている。

## 注

- 1) 能勢氏の歴史については現在豊能町牧の長沢家と能勢町地黄の真如寺に伝わる『能勢物語』があり、森本式編、塩田豪一制作による翻刻が能勢郷土史研究会から刊行されている(1989年刊)。
- 2) 拙作『名月乗桂木』とともに最初の人形入り作品として作られた新作浄瑠璃。祝儀曲としての意味合いが強く、公演の最初の演目として演じられて舞台を浄める意味もある。また、上演時間が短いこともあり、能勢の浄瑠璃を紹介するのにもうってつけで、能勢町にとどまらず、各地での上演数はきわめて多い。人形は男女の二人三番叟の形をとる。この作品の中に、当地の名産に関して「能勢の三白三黒も腹八分目」という一節があり、「三白」は米、寒天、高野豆腐、「三黒」は栗、炭、黒牛を意味する。
- 3) 2021年1月8日まで公開された。
- 4) 三味線の二の糸(三絃の中央に張る糸)の調子を上げて曲調を華やかにしたうえで歌うもの。
- 5) 募集要項は、国立文楽劇場などが以前募集していた「文楽なにわ賞」に準拠して作られたものと思われる。『文楽なにわ賞』でも規定枚数は「60枚以内」であった。
- 6) YouTubeで公開された本作品の上演時間は実質50分少々である。
- 7) 『斎宮暁白露』、『江戸情七不思議』の「送り拍子木」「異聞置いてけ堀」「異聞片葉葎」、狂言風オペラ『フィガロの結婚』など。